《学生座談会》

英語パイロット・プログラム
——教員が動く，学生が動く，そして立教が動く——

〈参加者〉 波多野陽介（社会学部社会学科１年）
谷口　有紀（社会学部社会学科１年）
小林　恵子（法学部国際比較法学科１年）
長島　隆太（法学部国際比較法学科１年）
〈司　会〉 渡辺　信二

司会　渡辺　今日は，コミュニカティヴ・コースを実際に受講している学生４名の方に集まってもらいました。

この授業は，97年度から始まる全学共通カリキュラムのパイロット・プログラムとして，現一般教育課程の学生のうち，社会学部社会学科と法学部国際比較法学科の学生を対象に実施されている科目です。特長として，学部ごとに同じ教科書を使用すること，全て英語で授業が行われること，週２回同じ教員が同じクラスを受け持つこと，スキルの訓練から次第にコンテントのほうへ導いて行くことなど，大学での英語の授業としては，あまり例がないと思われますが，まず始めに，全体的な感想から聞きましょう。

緊張感が生む笑い

司会　たとえば，大学で週２回，同じ教員に会うのは変な気がしない？

谷口　そのほうがうれしいです。

波多野　ずっと会ったほうがいいと思う。

長島　あまりに疎遠なのもどうかと思います。

谷口　違う先生で語学をやると，並行してやれないじゃないですか。どちらも違うことで。

波多野　連続性がないよね。

谷口　だから，同じ先生がいいと思います。

司会　週２回あって，飽きることはない？

谷口　飽きません。

波多野　あまり積極的でない人，参加しようとしない人は，たぶん飽きていると思いますけれども，楽しもうとすれば，どんどん楽しくなるという感じです。だから，どうしても積極的になれない人は，端にいたりします。

小林　その日の授業で，必ず最低１回は当たるようになっているから，みんな授業の始めは，いつも緊張している状態ですね。気が抜けない。ある意

味では，怖い授業です。

谷口　そうですか。

波多野　でも，逆におもしろくもあるんじゃないですか。

小林　ええ，おもしろいですね。

長島　ほかの授業が，緊張感が全くないから（笑）。何しろ寝るわけにはいきませんからね（笑）。

小林　寝られないですよ。

波多野　緊張感があって，ギャグとかも生きてきて，生き生きするという面もあるから，そういうリズムは必要じゃないかと思いますよ。

司会　笑いなんかも起きるの？

谷口　起きますよ。ミスター・ショールズは，授業の始めに，絶対にということはないけれども，しょっちゅう自分の生活についておもしろかったこととか，感動したこととかを，英語で説明してくれるんですよ。それがすごく楽しいです。それでみんなを惹きつけている。

長島　それは鳥飼先生もやっているんですけれども，まあおもしろいかどうか，苦しいところで（笑）。何で笑えるかというと，教壇と机，教師と聴衆の間の断絶がない。

谷口　それはいいですよね。

長島　たとえば大教室の授業だと，教壇があって，段差があって，それが実際の物理的な断絶以上に感じられる。向こうにスピーカーがあって，画面があって，そこから流れてくる授業，それをノートに自分たちが写す。特に一般教養は気楽に受けられる講義ですね。一般教養は，大半が何か感じない授業というか。

小林　座って，何か動きがないでしょう。1対多という感じで。私たちのクラスは，狭い教室だけど，先生もよく動くんですよ。私たちも必ず，今の問題に関して，女の子は男の子2人と必ずしゃべらなければいけないとか，男の子1人と女の子1人としゃべらなければいけないとか。ズルしてしゃべらないと，後で指されたときに，答えられないでしょう。だから，すごく緊張する。クラスにけっこう動きがあるんですね。では，パートナーを変えてみましょうとか。

谷口　パートナーを変えていくと，仲良くなれますよね。

小林　そうそう。きょうはだれと，ああ，あの人と会話しようという感じで。

司会　その会話自体は，学生同士も英語でしなくちゃいけないんでしょう。

小林　そうです。

長島　ときどきズルして日本語でしゃべってる（笑）。

小林　ちょっとね。

長島　日本語でしゃべるなって言うんですよ。

波多野　よく言われる。

長島　日本語でしゃべると，話しやすいから雑談に入っちゃうことが多い。

波多野　話がどんどんずれていって。

司会　毎回テーマみたいなものが決まっていて，それで進んでいくのかな。

波多野　テキストはあります。とりあえずあって，何について話してみましょうというのがけっこう多いですね。この間やったのは，たとえば物語があって，五人の登場人物が出てくるんですけれども，だれがいちばん悪いと思いますかとか，どういうところで違いがあるか言わせてやってみたり，そんなことをしています。

司会　新座と池袋とで，それぞれ1回ずつあるんだよね。

波多野　そうです。

司会　その組み合わせはどういうふうになっているの？

波多野　組み合わせですか。

司会　こっちは何で，あっちは何とか。

波多野　いや，うちのクラスは，連続していますよ。

司会　そうしたら，同じ教科書がいちおうベースになって，それを基にしながら，トピックが広がるということですか。

谷口　ええ，そうです。まず最初に，パートナーを隣同士で作って，それで何分間か話し合った後で，先生がどこかのグループに当ててという感じです。

司会　それで，何を話したか，英語で報告するわけですか。

谷口　はい，そうです。

司会　そうか。君たちのほうはどうですか。法学部のほうは。

小林　テキストはあるんだよね。

長島　テキストがあって，書いてあるテーマに沿ってやっていくというのは同じなんですけれども，ときどき外れるというか。必ずしも教科書に書いてある，何々しなさいとか，何々について話し合ってみましょうというのではなくて，もっと本質的におもしろいことについて話し合ってみようというのはありますね。

小林　教科書から全くずれてはいないんだけれども，先生が自分でちゃんときょうの授業のやり方を考えてくるので，予測がつかない。最初のころは，困らないように予習していこうと思って，テキストを読んで，ああ，きょうはこれについて話し合うんだなという感じで考えていったり。前期はそういうことも多かったんですけれども，後期になったら，それはほとんど少なくなって，先生が自分でそのテーマからずれない程度に考えてきている。

だから，後期になったら，ますます緊張度が高まった（笑）。何をやるか予測がつかないから，予習もできない。まあしてもいいんだけれども，その日，行ってみないとわからない。始まってみなきゃわからないので，私はすごく緊張しますね。最初は憂鬱だったけれども，でも，だんだん最近は楽しくなってきた。

長島　ただ，先生が重視しているのは，文法面ですね。教科書の右上のほうに，たとえば過去形とか過去分詞とか現在進行形とか書いてあって，それを使った会話をする。

小林　押さえるには押さえているけ

れども。

谷口　ええ，そうですね。

波多野　だいたい同じですね。教科書はとりあえずベースなんだけれども，それに沿っているわけではない。

小林　教科書だけではない。

長島　ネタにはなるけれども，文法は，とりあえず一から最後まで。そういう感じですね。

司会　最初，憂鬱だったというのはなぜですか。

小林　答えられないので。

司会　ああ，答えられないから。英語が出てこないという意味ですか。

小林　それと，やっぱり日本人だけでしょう。そこで何か英語で答えるのはちょっと恥ずかしいというのもあるし，ずっと緊張して，ちょっときついかなというのもあって。最初はちょっと苦痛だったかな。

動きのある授業

長島　一人ひとり将来の夢について，自分はどうしたいとか，そういう発表もありましたね。

小林　スピーチ，やりますよね。

長島　自分は大してよくできていなかったと思うんですけれども，注意点がいくつかあって，大きい声でしゃべる。あまり紙を見ない。まあこの二つを押さえる。なぜかというと，英検で上のほうへ行くと，ディスカッションみたいなのがある。それに通用するような形でスピーチしようというものなんですね。

波多野　こちらの授業では，一つの題材があって，それについて意見を聞くというのはありましたけれども，スピーチというのは，あまりやっていないですね。前に出てやるとかいうのは。

谷口　ただ，十分以上遅刻したら，3分間スピーチ（笑）。

長島　うわあ。

波多野　あった，あった。

小林　それはきつい。

司会　休んだらどうなるの。

谷口　休みが何回か重なったら，Aだったら B に下がっていくとか。

司会　そうか。何か楽しそうな授業だね。ぼくも出てみたい。

小林　どうぞ。池袋はちょっと教室がキチキチで，学生と先生で一杯ですけれども，新座だったら，部屋も広いから，椅子がかなり空いていますし，ゆったり座れるし。

波多野　池袋はとにかく狭いですからね。

小林　狭いですね。

長島　ほんとに狭い。

谷口　動くのが大変だよね。さあ立ってと言われても。

長島　ここまで狭いと，教師も生徒もへったくれもない（笑）。

司会　何番教室でやっているの？

谷口　5号館の5204です。

司会　あそこは狭いね。

小林　26人ぐらいですか。でも，キチキチです。

波多野　うちの授業は，授業前に机を動かします。ハイ，机を端に寄せて。

みんな一斉に。

長島　うちはボランティアでやっています。ぼくが動かしているんですけれども（笑）。

司会　そうか。机を使わない授業なんだ。

波多野　そうです。

谷口　輪になって。

長島　机を使わないということは，椅子は使うわけですか。

波多野　椅子だけ使う。

谷口　椅子だけを端に寄せて座るんです。

波多野　それでもけっこう狭いです。

司会　そうすると，メモなんかは全然とらないんだ。

谷口　ノートを膝で（笑）。

波多野　でも，とらなきゃいけないというわけでもないので，テストで困るわけでもないし。とりあえずとっている感じですか。とらない人はとらないし。

司会　そうか，そうか。君たちのほうは，どうなっているの？

長島　長椅子じゃなくて長机……。

小林　長テーブルに椅子ですね。

谷口　新座のほうも？

小林　長テーブルに椅子。大小の違いだけで，四角くかこんで……。

波多野　そういう方式もなかなかいいですね。

小林　すぐ立ってと言われて，ペアを組んで，いまのことについて会話をしてくださいと言われたり，テーブルの真ん中に出てきてやりなさいとか，あるじゃないですか。

谷口　でも，動きのある授業は飽きなくていいですよね。

小林　飽きないですね。ゲームとかあったら，もっと楽しいんだろうけど（笑）。

谷口　うちはけっこうありますよ。ゲーム。

小林　ありますか。

谷口　ええ。先生が工夫していらっしゃる。前期は，風船を飛ばしながら英語を言うとか。

司会　何て言うの？

波多野　単語で，文章をパッパッパッとつなげて，つなげて，つなげて。

谷口　そうそう。輪を作って，できるだけ長い文章を作ったグループが勝ちになる。それで，I am とか…（笑）

長島　それと比べると……。

小林　うちは地味だね（笑）。

英語を臆せず話す

司会　そうか。ほかにもう一つ英語2の授業があるでしょう。

谷口　何か文法中心で。文法でもないけど，全然違う感じがする。どこが違うんだろう。

司会　結びついてはいない？

谷口　全然違います。

波多野　関係ないというか。いや，関係ないまではいかないけど。

司会　でも，英語2の授業はネイティブの人でしょう。

波多野　そうです。

谷口　私は違います。実松先生です。

司会　ああ，実松さんか。でも，英語だけでしょう。

谷口　ええ，英語でやっています。

司会　最初，英語の授業がわからなかったけれども，授業を受けてだんだんわかってくるようになったとか，そういうことはないですか。

谷口　そのへんは何か別物という感じがするんです。

司会　全然別物ですか。

谷口　はい。

長島　ぼくのところの英語2はかなり違っていて，劇をやるんですよ。寸劇。

谷口　えっ，劇？　おもしろそう。

小林　きょうたまたまあったんですけど，これを使っているんです。日本人が読んでもあまりおもしろくないと思うんだけど，まず，一連のテーマに沿った，アメリカンジョークみたいな，必ずオチがついたストーリーがあって，それを訳すんです。前の週に，この列は来週当たるからと言われていて，すでにグループが作ってあって，自分たちで，似たようなテーマやオチを入れた会話を作って，お芝居をしなきゃいけないんですよ。

波多野　それはおもしろい。

小林　だから，私たちは3週間に1回，漫才師のように，ボケとツッコミを入れてオチを考えなければいけなくて。

谷口　おもしろそう。

小林　それも，慣れればいいんだけど，最初のころは，何でこんなボケとツッコミをやらなきゃいけないのかなという感じで……（笑）。

司会　ロールプレイング・ゲームみたいなことなのかな。

波多野　ガーニェさんの授業は，テキストがあって，たとえばラジオ英会話なんかで使うようなものを読んで……。全部英語なんです。だから，和訳とかはないんです。英語を読んで，あとは前でスピーチを1分間やるんです。そのために，たとえばこういう感じで書いてくださいと言われて，書いて，読んで。なるべく目は前に向けて，見てから，前を向いて話す（笑）。それを気をつけるようにということだけ言われて。だいたいそれだけですね。あとはあまり……。スピーチもあまり聞いていないし（笑）。

谷口　実松先生の授業は，まず最初は，実松先生の作った教科書でリスニングをして，テープを聞きながら教科書に沿った問題を解いていくというリスニングの問題をやります。それから，身近な，自分の家族についてとか趣味についてのスピーチを，自分でそこで作って，3分間話せるように訓練するというのをやります。アバウトに先生がだれかを当てて，その人がスピーチをするという感じです。

司会　そう。おもしろそうじゃない。話がパイロットのほうのペアクラスからずれ始めたけれども，ぼくが聞きたかったのは，英語力が実際ついているかどうか。そのへんの実感みたいなものはありますか。

小林　わりと，しゃべることに対して臆することはなくなりましたね，私の場合は。

司会　それは大きいね。

波多野　英会話を学ぶうえでの基本的な姿勢みたいなものは，何となくできたような気がします。それは，臆することなくという部分が大きいんですけれども。

長島　気構えがなくなったというか。

司会　前は，構えていたということですか。

長島　何で構えるかというと，やっぱり英語の辞書と日本語の辞書，ダブルスタンダードが日本人の頭のなかにあって，英語を話すときは，日本語からいちおう英語の辞書で訳して，それから日本語の論理で考えて，アメリカ人に話すとか。そこまでが長いんですね。それが面倒臭いというか。どちらの辞書もおぼつかないような人だと，億劫になる，気構えもできる。そういう感じですね。

谷口　目の前で英語を話すというのが最初はいやだったんです。発音もおぼつかないし。それでも，恥もかき過ぎればもう全然通り越しちゃって(笑)。だから，英語に慣れみたいなものができました。

司会　そうか，そうか。

小林　１回笑われちゃうと，気が楽になるよね（笑)。１回何か失敗して，ドーッとクラス中から笑われると。私も，たぶん高校のときだったら，顔が真っ赤になって，ああと思ったけれども，最近は，ねッみたいな（笑)。週２回やっているから，クラスが慣れてきたせいもあるよね。

長島　あれだけ英語をしゃべっていれば，やっぱり慣れますよ。

小林　毎回必ず１回は当たっちゃうもんね。

これが英語の授業だ

小林　前に，ロンドンに行ったときに，もったいないから，午前中だけ語学学校へ行ったんですけど，そのやり方が，今の鳥飼先生と本当によく似ているんですよ。ある程度少人数なんだけれども，もちろん全部英語で，最初にペアを組ませるんです。ユー・トゥ，ユー・トゥ，ユー・トゥとペアを組ませて，ちょっと五分ぐらい生徒同士で話させるんですね。教科書も，だいたい同じで，それで，五分ぐらいたった後に，やはり必ず指されて。人数が少ないから１時間１回どころではないんだけれども，端から，サマンサさん，どうですか，ケイコさん，どうですかと指されて，クラスのなかでしゃべる。それに対して先生が質問したり。全部英語だから，恥ずかしいとか，気後れしている時間がないんですよね。弾丸のように来るから。それは今の授業も同じですね。あまり恥ずかしいとか，躊躇している隙を与えないぐらいに来てしまう。

それで，答えれば，またそれに対してほかの人はとか，先生も聞いてくるでしょう。どんどん発展していますよ

ね。だから，みんな自然に言わなくちゃという気になって，すごく楽しいですよね。そのときは，それほどひどく高くはないんですけれども，ああ，やっぱりお金を払って語学学校へ行かないと，こういう授業は受けられないのかなと思ったんです。

入学前には，大学の英語の授業っていったいどんなものだろうと思ってね。やっぱり机の前に座って，先生１人と学生が多くという形かと思ったら，こういう形だったので，私は何かすごく得したというか。大学でこういうことをやっているんだみたいな感じで。

波多野　得したって，すごく感じる。

小林　最初は素直にそういう気持ち。ああ，得しちゃったみたいな。

長島　ぼくは，やっぱりこれが大学の英語なんだな，と。某NOVAとか(笑)，某ECCとか，ぼくは行ったことがないので，本当に高校の１対多数の英語しかやっていないんですよ。１対１のマン・ツー・マンでも，日本のやつは小規模だと本当にいい加減だったりするんですよ。ですから，それだったら，高校の１対多数のほうがましじゃないかと思っていたんです。ここに来て初めて，本格的なマン・ツー・マンの授業を受けましたから，よかったなと思っています。

谷口　今の授業形態って，集団でやるんですけれども，それでもいいところがいっぱいあります。まず，クラス同士で仲良くなれるのと，それから，うまい人がいると，自分も刺激されて，あの人はあんな頑張っていると思って，自分も頑張る気になれるところがいいところだと思います。

司会　ぼくが君たちぐらいのときは，だいたい講読形式だよね。教員が教科書を決めて，それを「ハイ，訳して」といって，訳していく。

谷口　そうなんですか。

波多野　高校と変わらない。

小林　でも，第二外国語は訳すのが多くないですか。

長島　もうほとんどそうですね。

波多野　第二は，でも，文法からやらないとという面がやっぱりあるでしょうね。文法から入らないと読めないし。２年目に真価が問われる。２年目も同じだったら，使えない。

小林　みんな１年生だからね。２年目は，本とか新聞とか，訳だけになっちゃうんです。

谷口　えっ，訳ですか。

小林　講読というか。読んで訳す。新聞とか本とか小説とか。

谷口　コミュニケーションはないんですか。

小林　ないですね。

長島　フランス語ですよね。

小林　ええ。いま１年生は文法ですごく苦しんでいるじゃないですか。ラテン語とかフランス語にしても，中国語にしても。訳すのが中心になるから，２年のほうが楽ですよ（笑)。

波多野　第二外国語と英語が違うのは，英語は，結局は長い間の下積みがあわけです。第二外国語は大学から始

める人が多いから，そうすると，やっぱり２年で会話というか，２年でもまだ文法がおぼつかないという面がやっぱりあると思うんです。英語は，中・高で文法は飽きるほどやったでしょう。ぼくなんかもう……。あとは単語が咄嗟に出てくるか。カッコ埋めなんて，あんなのはいくらでもできるし，作文もできるし，解釈もできるけれども，咄嗟の一言が出てこない。それがいちばん足りないと思うんですけれども，第二外国語は単語もわからない，活用もわからない，というところから始めているから，会話まで行けるかなというのは疑問です。

小林　会話は難しいかもしれないね。

谷口　日本の外国語教育って，使えない言葉から入ると思うんです。この間，タイに行ったら，タイの人たちは１年間で日本語をマスターしちゃうというんです。それは私たちにとっては全然無茶な話で，だいたい日本人は文法を丁寧に丁寧にやってから，そのうえで会話をやるから，ずっとできないまま，文法の達人になってしまう。

長島　それは実用に迫られているかどうかの問題だと思う。

波多野　うん，それはある。

長島　タイの人は，たぶん働くのに使っているんだと思います。日本の場合どうかというと，いくら国際社会でこれからは英語うんぬんといっても，中・高では，外国人の生徒が半分以上いない限り，使う必然性がないと思うんです。

波多野　必然性がないと，やはり集中できないし。

長島　それだったら，やっぱり理論から攻めていったほうがいいかもしれないと思うんですけれども，それで英語嫌いになっているのが現状ですからね。

小林　私の友達が言っていたんですけれども，私たちは中・高で文法から英語が始まるけれども，日本語で必ず説明して英語を教えてくれるでしょう。それより，英語の時間だけは，最初はだれでもわからないと思うけれども，文法の時間も全部，英語でやってしまう。とにかく英語で教えて，その時間，英語のことは英語で考えさせるようにすれば，今よりは日本人全体が伸びると思う。

今の私たちの口語英語の授業は，先生はほとんど全部英語ですよね。みんな自然に英語で考えるようになっていると思うんですよ。頭のなかで日本語にして英語に変えるのではなくて，咄嗟に英語で考えないと答えられないという感じで，考えるようになっていると思うんです。だから，ある言葉について勉強するときは，その言葉を使わないと。日本語でやっても上達する人はいるけれども，そのほうが速い。スピードはきっと違うんじゃないかなと思います。

長島　それに移行するのは大変だと思いませんか。今の制度から。

小林　最初は大変だと思う。

長島　ダブルスタンダードが作られ

るのは，中・高の六年間ですよね。

小林　英語の時間は全部英語でやってしまうほうが，私はいいんじゃないかなと思います。

波多野　正論だな。

司会　読む力はどうだろう。単語力，ボキャブラリーとか。

谷口　減っていく気がします（笑）。

波多野　たぶん中落ちじゃないかな。

小林　宿題があるもんね。

司会　君たちは宿題があるんだ。

小林　最近はあまりないんですけれども，前期なんて，週に2回なのに，えっというぐらい，毎日ありましたね。

長島　毎日ありましたね。

小林　たとえば，中国のお祭りの話を授業でやったとすると，では，自分たちが住んでいる地域のお祭りについて，外国人に説明すると仮定して書いてきなさいと言われて，みんな地元の祭りについて書いてくるんです。川越の人はきっと川越祭りを書くだろうし，もし青森の人がいたらねぶた祭りのことを書くだろうし，そういう感じでやらせるんです。テーマに沿ってね。

波多野　それは，英作文力とか，解釈の力を落とさないという意味で，すごくいいんじゃないですか。

小林　けっこう大変だよね（笑）。

長島　いちばん大変だった。

小林　ただでさえ，1時間半，神経すり減らしているのに（笑），水曜日と金曜日だから，水曜日の授業が終わって宿題が出されるでしょう。ああ，金曜日って，明後日じゃないかと思って，けっこう……。

長島　いちばん大変だったのは，核戦争が起こった後の世界について書いてこいというやつがあって。

谷口　エーッ。

司会　おもしろいね。

長島　おもしろいんですけど，それを自分で……。

小林　緊張しているから，こういうことについて書いてきてくださいと言われた英語を間違えてとってしまうと，次の時間，自分のを発表してくださいと言われて「ン？」っていうことになっちゃう（笑）。もう緊張の連続。緊張が緩まないんですよ。質問の内容と自分がやってきたことが違うと，恥ずかしいというのもあるし，エッと言われちゃうじゃない。だから，質問も注意して聞かないと，次の時間に大変なことになるんです。

長島　エッと言っていた人，確かにいましたね。

小林　私もときどき，エッ，間違っているとかけっこうあって（笑），タラッと冷汗かくときがある。でも，間違っていようが何だろうが，とにかくそれを後で回収するんだよね。ハイ，アサインメントを出してくださいと言われて。あららだよね。

長島　核戦争が終わった後の世界についてどうのと言われたとき，何が大変だったかというと，まずイマジネーションの問題があって，ボキャブラリーの問題があって，さらに仮定法でやらなきゃいけませんから，文法の問題

がある。

小林　そうなんですよね。

波多野　それはすごくうまい。教える側にしたら，言うことなしの戦術というか（笑）。

小林　やられるほうは大変ですよ。

来年はどうなる？

司会　この前，全カリの内示集会がありましたけれども，何か一言あれば言ってください。

谷口　学生と学校側の対立の図がはっきり見られておもしろかったです。学生がすごく食ってかかって，先生のほうは抽象的なことを言って，それでうやむやにして終わらせよう（笑）。見ていて楽しかったです。

長島　市民と政治家みたいなね。

波多野　ぼくは，そんなに対立の図式ってなかったと思うよ。

谷口　そう？　そんなにきついのはなかったけれども。

長島　底辺には，大きな対立があるけれども，表面的にはない。それを出さないと，結局，解決にならないというか。ぼくは体育会なんですけれども，体育会でも，授業を真面目にやって欲しいというタイプなんです。

司会　それがいちばんいいじゃない。

波多野　すばらしい。

長島　ただ，9・10に必修が入るというのが，体育会にとっての問題だと思います。

波多野　具体的な話は，語学のところでは出ましたけれども，全カリでどう時間割りを入れるかとか，学部必修はとか，そういえばあまり出ませんでしたね。

司会　英語インテンシブのお知らせなんか，もらった？

波多野　何か挟まっていた気がする。

小林　これかな。案内……。

司会　そうそう。

谷口　入るときにテストがあるんですか。

司会　30名を超えれば，入るときに簡単なテストがある。でも，火・水・木・金の1・2限だから，それほど込まないんじゃないの。(注)

谷口　1・2限はきついね。

長島　それが英語3，4の代わりになるんですよね。

小林　行こうかな。

波多野　再来年は受けられないんですか。来年は専門がすごい。

司会　いちばんいいのは，1年生でちゃんとやって，2年生でやって，3年生でやってというのがもちろんいい。だんだん力がついていくから。

小林　来年は英語3しかない。

司会　そう，いま英語を3回やっているけれども，来年は結局1回になってしまう。

谷口　どっと減るんですね。

波多野　どっと減るのはいやだな。

谷口　いやだ。

司会　いやですか。

谷口　しかも読むのが中心なんですよね。

司会　英語3はそうだよ。

谷口　そうしたら，話すのが全然ない。

波多野　それじゃあ，つまらなそうな気がしてきた。

谷口　でも，自由科目で取りようがありますか。

司会　自由科目は，コンピュータ，英作文，講読2，時事英語。

波多野　時事英語って，しゃべるんじゃないですか。

司会　時事英語で，しゃべってくれって言う？（笑）

谷口　新聞を読んだりするんですか。

小林　社説とか。

司会　新1年生は週4回の授業があって，それでもう終わり。

谷口　2年生に英語は何もないんですか。

司会　ない。

波多野　それもちょっとな。

小林　それもちょっと問題がある気がする。

司会　でも，インテンシブ・コースとか自由科目もすごくいいのができるのよ。翻訳コースとか，通訳コースとか。もう少し余力があれば，TOEIC，TOEFLとか，ああいう留学向けの，あるいは，英語力をつけるためのものもある。

谷口　総合のほうですけど，私が好きな先生の授業は充実しているのに，非常勤だから，全カリの都合で来年からやむを得ずなくなってしまうんです。それで，どうにか続けて欲しい。そう内示集会で言ったんです。

司会　結局，その答えはどうだったの。

谷口　全カリの説明会の後で，理学部の先生がきてくださったんですけれども，今年は絶対無理ですと言われました。でも，要望書を出せば，その要望書次第で，再来年は可能性が十分にあると言われました。だから，やるにはやるんですけれども。

授業内容と出席の関係

波多野　結局，先生が変わらないんじゃ，授業名を変えようが，焦点を絞ろうが，パーソナリティのない人ばっかり。

小林　厳しい。

波多野　勉強したいから授業に出ているのに，出ると出席を取りますだけで全然ためにならないし，つまらない。あーあ，というのがけっこう多い。周りの人も一つか二つあるんじゃないかな。出席を取るくせにつまらなくて，ためにならない。

おもしろい本を1冊買ってきて読んだほうがためになると思いますよね。けっこうテキストの選び方も，なんかわかりづらくて，要点がつかめないみたいなものが多いので，こっちの本を読んだほうが早いというのが，けっこうありますね。

出席なんか，ぼくは廃止したらいいと思うんです。運動したいやつはすればいいしという感じで。その代わり，授業のクオリティは絶対落とさない。じゃまするやつは来るんじゃない。違

う方法で同じものを学んでも，ちゃんと答えを出してくれば，それでいいという考え方がぼくは好きなんです。そういう考え方は，極端だと言われますけれども。

小林　でも出てないと，ヤバイですよ。すぐわからなくなっちゃうから。あまり気が抜けないんです。大変なの。

波多野　専門科目ですか。

小林　そうだけど，けっこうほかのもそうじゃない？　前が1回抜けると，次の話は，続いて話しているから，ちょっとまずいかなという感じ。

長島　ぼくが受けている一般教育は，ほとんど板書をとらないんです。出席していないと，テストができないですからね。

小林　言ったことからテストに出すみたいに言われちゃうと，何かもう気が抜けないよ。怖いよ。

長島　テキストで要点がまとめてあって，さらに話をするから。

小林　ああ，あのことを言っているんだね（笑）。

司会　何？

司会以外の全員（笑）。

長島　前半は授業の出席を取っていたんだけれども，それはもともと，最初から点数には入れないと言っていたんです。それでも，出席カード目当てに出席する人がいたんですけれども，それだけでは，後半になると，おもしろいと思って，なおかつ真面目にやる人でないと残らない。そういえば，後ろのほうで私語がうるさかったんですけれども，だんだん減ってきて。

司会　総合科目というか，三分野のほうは，基本的には教員が情報を伝達する形だけれども，それと比べて，語学はやっぱり訓練の部分があるから，君たち自身から言葉を出せということだよね。それがうまくできると，語学としてはいい授業になってくるんだよね。

長島　しゃべるようになりましたからね。

司会　インプットよりアウトプット，それを何とか勇気づけていく授業が，たぶん語学の授業，特に英語の授業だと成功なんだろうね。

小林　12月，あと1ヵ月ですね。この調子で，ああ，語学は終わるんだなと思ってたら，どんどんエスカレートしているよね（笑）。最近は，ちょっと重荷になってきた（笑）。12月，あと1ヵ月なんだけれども，今度，ディベートをやると言い出して，グループ分けをして。

谷口　大変ですね。

小林　情報収集もしなくちゃいけない。今まではドキドキしながら授業に出るだけでよかったんだけれども，予備の準備があって。私はこのまま安泰にこんな調子で終わると思ったら，何かえらいことになって（笑）。すごくエスカレートしているよね。

波多野　おもしろそうじゃない。

長島　ぼくは高校のころ，ディベートをやっていますから，慣れているんですけれども，大半の人は，英語で意

見を発表するとか，質問というのはないと思うんです。発表はあっても，質問というのは，案外，英語の授業でなかったような気がするんです。

小林　今週の金曜日が恐ろしいですね。テーマ自体は，ちょっと幼稚だと言われそうな気がするけれども。肯定派と反対派に分かれて，すでにグループ分けをしてあるんです。資料を集めてきて，ちゃんとできなきゃいけない。

長島　日本人はどうも人間関係の持ち込みをするんですよね。ディベートをやると。

波多野　でも，ゲームって，本気にならないとつまらないでしょう。

長島　後味がすっきりしないのが日本人なんですよ。

波多野　すっきりさせないんじゃないの。

小林　あと1ヵ月で，ほとんど実質的には授業が終わりますよね。1年間を振り返ってみて，英語とほかの科目を比べてはいけないかもしれないけれども，英語はすごくテンションが高かったよね。めちゃくちゃ高かった。巻き込まれちゃったみたいな。

長島　先生の個性というのもあったかもしれない。あまり個性のない先生がこういう授業をやると，どういう問題が発生するんでしょうかね。

司会　それはいい質問だな。

波多野　ハード面があっても，ソフトだと，どうですかね。個性がないというか，やっぱりプロ意識のない人は，学校側でも採るべきではないし，採った時点で，自分の大学の教育のレベルを下げていく。

司会　それは教員採用の話か。

波多野　根本的にはね。

長島　それはやっぱり学生から要望も出さなければ。

波多野　学生がそういう人を選べるかどうか。

叱る先生，褒める先生

小林　生徒を叱れない先生って多いですよね。私，今回，英語の先生を見ていて，ものすごくその個人の個性もあるんだけれども，やはり刺激を受けたのは，とにかく不真面目な人，やる気のないやつを怒る。やっぱり怒る先生は熱心だから，お上品とかお上品でないとか，野蛮とか野蛮でないというのではなくて，私の世代は，それをやはり情熱として受けとめる。

私がちょっと年下の人たちと付き合っていて思うのは，先生が怒ると，なぜ怒るのという反応が多い。私はそこで世代の違いを感じるんです（笑）。私たちは怒られて当然，怒って当然。だけど，今の人たちは怒られてきていないから，なぜ怒るのってなる。そういうのがわかっていて，先生たちは怒らないのかなと思ったんですけれども，ちゃんと怒る先生はものすごく真面目ですし，私は刺激を受けました。

波多野　そういう先生って，絶対，プロ意識があるでしょう。

小林　怒らない先生が多いですよ。

波多野　言うだけのことをやれば，

それだけ返ってくるという自信が先生にあって，実際そうなることが多いんですけれども。

小林　自分が先生だったら，こんなことをされたら絶対怒ると思うんだけれども，怒らない先生が多いですよね。予習もしないで授業に出てきて，寝ている。私はそれにいちばん驚いたんです。あら，怒らないのって。私だったら怒るよみたいな。

長島　何なんでしょうね。教師と学生の緊張感というものが当然あったと思うのに，なくなって，ほら，某ゼミとかでやっている衛星中継。衛星中継は寝ていてもいいんですけれども。要するに，当然あったものがなくなっちゃったんじゃないかと思うんです。

小林　特に語学に関しては，やっぱりキャッチボールみたいなものだから，衛星中継みたいなものはどうかな，効果もどうかなと思うけれども，出てきても乗り気じゃない人とか，予習をしてこない人とかは，ガンガン怒ったほうがいいと思いますよ。怒ればどうなるというものでもないかもしれないけれども，やっぱり怒るというのは，ふつうの人間の感情だから。やはりそれで刺激を受けるものがある。とにかく怒らない人が多いというのは，びっくりしたことです。

司会　褒め方の上手な先生というのもやはりいますか。

小林　だから，怒る人は褒め方もうまい。ちょっとやり過ぎだなと思うときもあるんだけれども。変に刺激を与えて競争心を燃えたたせようとか，そういう魂胆が見えたりする（笑）。でも，怒る人は褒め方もうまいんじゃないかな。怒る分，やっぱりフォローというか，怒るだけじゃダメでしょう。

波多野　緩急をつけて。

小林　怒っても，その後に，じゃあみたいなのがあるから。怒る人は褒め方もうまいと思う。

長島　人生の機微というか。

小林　怒らない先生だと，真面目に出ている人は，何だということになりますよね。思いませんか。

波多野　授業の質を高く保っておいて欲しいのに，それをしない先生って，ざらにいますからね。どんどんどんどん下がっていく。どんどん下がっていくのに止めない。授業のレベルを保つのは，その先生の責任だと思う。

小林　中学や高校ではないから，みんな均質的に高めなくてもいいから，授業に出ていても落ちるやつは落ちていく，伸びるやつは伸びていくでいいと思うんだよね。

谷口　それはそれでいいと思う。だから，先生も全部学生に任せちゃっているんじゃないですか。怒られたいという気持ちもあるけれども，任せてくれているんだな，と。学生の自主性を信じてくれているという感じも，いいようにとれば，ないでもない。

小林　でも，授業に来て，目に入っているはずなのに，全然感情を出さない。学生が一生懸命やっても全然刺激を受けない，怠けていても刺激を受け

ない先生を傍観していると，ああ，ただこなしているのかなという気もして。

谷口　それはある。

小林　真面目な学生はね。きっと怠けている学生は，ああ，楽でよかった，注意もされないしと思っているかもしれないけれども，真面目にやっている学生は，何だろうって思うでしょう。そういうところだよね。だから，伸びていく人はたぶん同じ授業を聴いていても，自分で勉強するから伸びていくだろうし，落ちていく人はずっと落ちていくから，いいんだけど，でも，やっぱりテレビで授業をやっているわけではなくて，いま教室のなかで1対多といえども人間対人間で授業をしているわけだから，もうちょっと悪いものは怒るとか，反応してもいいんじゃないのという気はする。あたかも私たちが目に入っていないみたい（笑）。反応しないで，淡々として帰っていってしまう先生が多いので，私はちょっとびっくりしちゃっていますね。

長島　いかに1対多であっても，30対1ぐらいの英語でそれをやられると，問題がある。そういう教師だったら，選択する時点で選ばないほうがいいんじゃないかという気がする。

小林　1対多でも，何百人でも，始終怒りっ放しの先生もいたでしょう。

谷口　始終怒りっ放しなんですか。

小林　その授業は前期だけだったんですけれども，うるさい，真面目じゃないことに対して怒っていて，私はすごく共感できたんです。ああ，この先生，脳の血管でも切れて倒れなきゃいいなと心配して祈っていましたけれどね。だから，1対多でも，やっぱり怒る人は怒るんですね。

長島　そうですね。いますよ。例外というか，例外的というか。そこらへんの人とは言わないんですよね。右から何番目，前から何番目のだれそれと言う先生もいるんですけれども，少ないですよね。1対多だと，やはりたらたら送っていればそれで済んでしまうようなところがあって。

波多野　そういうのをシラバスで明記すればいいんですよ。出席をとらないから，やりたくないやつは来ないでください。年末試験だけとってくれればいいですよ。

小林　真面目じゃないやつは出てくるなって書いてあるようなのもあるでしょう。

長島　いちばん厳しかったのは，年間30冊以上本を読んで……。

谷口　ああ，あった，あった。100冊じゃなかった？

波多野　だれだっけな。

小林　生物の上田先生じゃない？

谷口　文学でもあった。

小林　本を読まないと，サルになるって言っていますからね。

波多野　知的格差が広がるというのは，みんな言っていますよね。ほんと，そうなるでしょうね。

小林　だから，授業に出ていて，すごく素直に反応する。怒ることもそうだけれども，学生に対して真摯な態度

で，怒るなら怒る，ちゃんとやるならやるみたいな感じで言う先生に会うと，私はすごく刺激を受けて，大学に来てよかったなと思いますけれどね。

長島　たまに怒られるんですけれどね（笑）。

小林　私は怒られたことがない。何をやったの？

長島　鳥飼先生には怒られたことがないけれども（笑）。まあ一般論的な話で，授業をやっているときに怒られると，まずカッとくるとか，感情的な部分はありますけれども，後になると，何としてでも理由づけしないと，学生にとっては，怒られた後，怒られ損というところがあると思うんですよ。それがよかったかどうかわからないんですけれども，何で怒られたんだろう，と（笑）。

小林　でも，ふつう先生が怒るのは，態度が不真面目とか。某自然人類学の先生は，勉強不足とか。怒りはしないけれども，勉強不足ですねと一言言って，グサッと刺して行ってしまうけれども。

男子　態度が悪いとか，私語が多いとか，そういうのは怒られるというか，マナーが不足している。

小林　それはよくないよ。

谷口　それで怒られたの？

長島　いや，そうじゃなくて，もっと……（笑）。寝ているとか，態度が悪いとか，予習していないとか，そういうのではなくて。

小林　えっ，ほかに理由があるの？

長島　もっと勉強の本質に迫るような怒られ方があるんじゃないかと思うんですよ。

小林　勉強不足ってこと？

長島　勉強不足とか，そういう初歩的なことじゃなくて。

谷口　わからない。

小林　難しい。

谷口　授業中にほかの勉強をしていたってこと？（笑）

長島　違う，違う。

小林　難しいね。長島君の怒られた理由って。私，わからない。

波多野　先生の学習空間の掌握力というのも，先生としての資質の一つだと思うので，そのへんができていないと，いい授業を保証できないし。

谷口　でも，いい授業でも，たとえばすごく大きい教室で宗教学の本当にいい授業をやっているのに，うるさい人が多い。それは先生の責任じゃなくて，やっぱり学生の責任のような気がする。

波多野　それは学生だけど，先生もまた割り切れないじゃない。来たくないやつは来るなって，本当に割り切っている先生は……。

谷口　でも，あの先生は割り切っているでしょう。

波多野　あの先生はそうなんだけど。そこから先は学生の問題だ。そこから先は学生のモラルの問題で，そういうものはずっと小さいときから積み重なっているんでしょう。そういう授業しか受けていない。高校はずっと内職し

ているとか，しゃべっているとか。そのぐらいならやったことがあります。しょうもない先生だったら，フンって感じになる。ちゃんと尊敬をかち得る先生は，ちゃんと自分のプライドを持って，聴いていればそれなりに自分に返ってくるものがあるから聴くところもあるけれども，説得力もない先生がなかにはいるわけで，そういう部分で両方のモラルというか，割り切りというのが必要じゃないかと思います。

小林　これは一般教養の科目ではなくて，専門科目なんだけれども，前評判では，怖いというか，この先生はちゃんと聴かないとダメだよという先輩からのうわさがあるじゃないですか。やっぱりその教室も何百人という教室で，タッカーホールでやるんですけれども，何百人いても，怖い先生，試験を落とす，難しいという意味で怖い先生だと，シーンだよね。民法Ⅰ，憲法Ⅰなんて。別の科目のときなんか，何百人もいて，ガヤガヤガヤガヤ，いい加減にしてくれみたいな授業だったのに，その同じ人たちが違う教室に集まって，シーン（笑）。カリカリカリカリという音しか聞こえない。

波多野　すごい。

長島　そういう次元でものごとを考えるのはどうかと私は思うんですけれども（笑）。

小林　そう？

波多野　もっとわかりやすく。

長島　だから，怖いとかいう前評判でやるというのは，やっぱりレベルが低い。

小林　でも，１回目の授業を聴いて，やっぱりみんな怖かったんでしょうね。だって，１回目とか２回目の授業を聴いて，ああ，こんなものかと思ったら，きっとまたガヤガヤガヤガヤ。同じ人が来ているわけだから，ガヤガヤすると思うんだよね。だけど，相変わらず……。

波多野　先生がそういう空気を作れる人なんでしょう。

小林　そうなのかな。

波多野　話のテンポとかでも，緩急織りまぜながら，学生の集中力を高める話術とか，手振りとか，パシッと集中を復活させたり，そういう技術なんじゃないかとぼくは見ています。

小林　私はそういうところはあまり分析していないんだけれども，すごい力だなと思って。同じ人たちが移動するわけよね。

長島　最初のころは，確かに板書なしでノートを耳で聴いてとらなきゃいけいなから，大変だなという意味で出ていたんですけれども，そのうち，これはおもしろいんじゃないかな，と。憲法Ⅰ，民法Ⅰだけだったら，導入の部分で終わっちゃうんだろうけれども，この路線で専門科目に進んでいくんだったら，きっと自分は法学という学問が好きになるんじゃないかという感じで。だから，ぼくは憲法Ⅰ，民法Ⅰに出るのであって。

さっきもっと高い次元でものごとを考えて欲しいと言ったのは，必要最低

限のマナーだけで勉強をやってもらいたくない。学問というものを……。

波多野　先を見て欲しい。体系立てて，いまぼくはこの部分をやっているんだという意識みたいなものがそこから生まれるということですか。

長島　そうですね。

小林　憲法Ⅰ，民法Ⅰも基本になるものだけれども，その前に，法学原理というのが最も基本になるものだと私は思ったんだけどな。はっきりいって，私はその授業，すごくおもしろかったけれども，でも，けっこううるさかったのね。だから，たいへんびっくりしましたね。こんなにおもしろいのに，どうしてみんなこんなに興味を持てないんだろうって。

長島　だったら何で法学部に来たんだということになる。

波多野　それを遡れば，高校に大学から出てくる情報が全然少ない。入ってからわかることが多いというか，入るまで全然わからないでしょう。

長島　結局は，入ってくる情報は偏差値だけですからね。ぼくだって，政治学部と法学部を掛け持ちした人間ですけれどね。はっきりいって，偏差値で掛け持ちしていました。ただ，似たようなところという感じがありましたけれども。

波多野　連続性がないというか。大学にバタッと出くわして，あれ，あれあれって思う。

長島　自分たちがやったあの丸暗記は何だったの。

波多野　つながっていないから。結局，バタッと出くわして，あれっ，違うぞと思い始めたり，投げちゃうとか。

長島　あれっ，違うぞに出会ったときに，これが本当の学問なんだなと思えるかどうか。本当の学問かどうか，疑わしい先生も多いのかな（笑）。

大学英語教育への期待

小林　それは英語でも言えますよね。今まで詰め込むだけ詰め込んできて，バタッと入って，さあ，みんなでしゃべろうといったときに，えっ，しゃべれないってわけでしょう（笑）。

谷口　気がついたらしゃべれない。

小林　すべて，何事においても今までずっと試験，試験で，ずっと筆記だったんだよね。いざ実践の場に出されたとき，えっという怖さがある。社会に出たときにね。あらっ，しゃべれないみたいな。テストは通ってきたけれどもみたいな。だから，ほかのものもそうなんだろうけれども，バタッとここから違うという印象で。やっぱり大学に来たら，それなりの苦しみがあるんでしょうね。

だけど，英語に関しては，この1年間，すごく中身が濃かったですね。何か次から次へとですよ。

長島　いったい何語くらいしゃべったか，わかりませんけれども，それでも，まだしゃべっていないんじゃないか。だって，1週間に2回だけで，別に毎月あるわけじゃなくて。

波多野　48回で1時間半ずつ。

小林　だけど，うちに帰っても，宿題がたくさんあったでしょう。あれでけっこう勉強しませんでした？

長島　いや，しゃべるということに関しては……。勉強しました？　自分でしゃべりながらレポート書いたりしました？

小林　アホみたいですね。１人でしゃべっていると（笑）。

谷口　やったんですか。

小林　いや，しゃべっていないけれども，想像すると怖いものがあるな。自分１人で部屋のなかでしゃべっていたら。テープは聞くけどね。でも，１人ではあまりしゃべらないでしょう。

長島　教室から一歩出ると，外人さんが歩いていて，積極的に話しかけるかどうか。とにかく時間はもう少し欲しかったかなと思うんです。

小林　そのためにインテンシブ・コースを用意してくれたんですね。

波多野　会話を学ぶ，本当に基礎の基礎はいいんですけれども，そこから大学のなかで完結していくものがないという感じがしますね。導入にはなるけれども，そこから本当に会話として使う方向へ大学のなかで持っていきたいのか，とりあえずやってみるだけなのか，方向性が今はいまいち見えませんね。

谷口　結局は，私たちは１年生で会話の授業をやって，それからは何もないんですよね。

谷口　興味を持った人が身につけていくんじゃないですか。大学内で。

司会　言語，言葉というのは，一面，手段なんだよね。英語を勉強するんのではなくて，英語で何かを勉強する，英語で何かを考えるという形に当然なるべきだろう。でも，まだ，そうなる一歩手前のスキルの訓練なんだと思うんだ。英語で法学をやる，英語で国際政治学をやる，英語で社会学をやる。やっぱりそのためのステップでしょう。だから，日常会話で道案内とか，ホテルへ行ったときの簡単なやりとりが上手になるなんて，それはできて当たり前だけれども，それを目指しているわけではないんだよ。最後は，コンテント・クラスだよね。ディベートなんかはそれに入ってくるんじゃないかな。

長島　鳥飼先生が，英語というのはマクドナルドのスプーンみたいなものだ，と。

小林　おっしゃっていましたね。

長島　マクドナルドのスプーンを大切にとっておいて，後で家で何度も使う人はいない（笑）。

小林　だから，使い捨てではないけれども，日常的にどんどん使っては捨て，使っては捨てしていくようなものだ。大事にとっておくというものでもない。そのとき，何となくよくわかりましたよね。ウーンとか，みんなでうなずいてしまいました。

司会　他方，言葉はいろいろな側面を持っているから，手段の面もあるんだけれども，言葉自体が自己表現というか，それ自体が対象である面があって，だから，そのへんをどうやってバ

ランスをとるか，難しいよね。日本語ではぴったりした言葉が今浮かばないけれども，英語でアートと言ったら，芸術という面と，技巧，技術という面もあるじゃない。言語はアートなんだよ。

谷口　ああ，ほんとだ。

小林　両方の意味がある。

波多野　そうか。

小林　技術だけだと無味乾燥になってしまう。芸術の部分ね。

司会　もう時間が過ぎちゃったね。

(わたなべ　しんじ　本学文学部教授，全カリ英語教育研究室員)

＊全学共通カリキュラム英語教育科目のパイロット・プログラムを履修している学生にこのプログラムへの感想や評価などを話してもらおうと，この座談会が企画された。座談会は1996年11月18日及び25日，２度にわたって行われた。パイロット・プログラムから始めて，話題が多岐に渡ったが，この記録はその内容を編集したものである。

(注)英語インテンシヴは，希望者が100名前後にのぼったので，1・2時限コースに加えて11・12時限コースを設けることが後に決定された。開講曜日は両コースとも，火・水・木・金である。